



6月30日に発行された初代副学長モーリス・E・トロイヤー氏とアルビラ夫人の「追悼特別号」に誌面の都合で掲載できなかった、元職員の轟令子さんによるトロイヤー夫人の思い出をお届けいたします。

ミセストロイヤーの料理教室

—トロイヤー夫人の思い出—

元職員 轟令子(1993年退職)

1966年8月15日、ビリー&モーリス・トロイヤー夫妻は、大勢のICU関係者に見送られて、横浜桟橋から、プレジデント・ルーズベルト号で帰国されました。9月4日午後ニューヨーク着と当時の記録にありますので、20日間の船旅だったのでしょうか。以後ミセス・トロイヤーが再び日本を訪れる機会は無かったようです。今から31年前のことです。古いことなので、ミセス・トロイヤーがいらした頃のICU、日本は今とかなり様子が違っていています。時代背景を示すものとしてトロイヤー先生が残された手紙のファイルから面白いものを見付けました。先に帰国されたアイグルハート夫妻宛のものです。「もっとも最新のデータです。大鵬が、三つ巴戦に勝って21回目の優勝をしました。柏戸を負かしました。」(1966・7・22)さらに補足すると、時代はベトナム戦争が始まった頃で、沖縄の本土復帰はまだならず、成田の東京国際空港はまだ有りませんでした。ICUのキャンパスには、本部棟やILC、ERB、体育館、湯浅記念館、パワー・ステーション、高校、いずれもまだ有りませんでした。

ご夫妻が帰国された前年、1965年に、私はICUに勤めることになりました。トロイヤー先

生の「価値観研究室」です。初出勤した日の午後、先生から、「今日は、ミセス・トロイヤーが篠達夫人に相談があるので、一緒に行って通訳して欲しい」と頼まれました。両家は、キャンパス住宅の隣合わせに住んでおられました。早速、トロイヤー夫人と一緒に篠達喜人先生宅を訪問しました。最初の挨拶に続いて、両夫人が交した会話が、「オクサマ イツモ ウツクシイ!」、「いえ、奥様こそ、本当にお綺麗です!」初対面の、第三者の私から見て、これは実感でした。60才台の方々でしたが、気品が漂う、稀に見る美しいお二人でした。当日の要件は、トロイヤー夫人が、カサード先生(音楽、オペラ歌手)から譲り受けた打掛け(葵の紋が入った、豪華な刺繍を施したもの)を屏風に仕立て直したい、という相談でした。篠達夫人のアドバイスは、着物は解くと数枚の長方形の布になるので、身頃で1枚、衿で1枚、両袖で1又は2枚出来るというものでした。ICU初出勤の日の優雅な思い出です。

トロイヤー夫人は裁縫をよくされたようです。価値観研究室の応接家具は、木工室の指田さん手作りのものでしたが、椅子には、夫人が作られたクッションが置かれていました。この

頃にはまだICUに、「ベビー・シャワー」の風習が残っていました。お産が近づいた方を囲んで、参加者が、何か1品ずつプレゼントを持ち寄りお祝いの会です。この様な折に、夫人がよく作られたプレゼントは、柳行李を可愛い木綿の布で覆い、中にクッションを敷いたベビー・ベッドでした。

毎週水曜日、仕事が終わった後、いそいそとトロイヤー先生宅へ向かう女子職員のグループがありました。私もその1人でした。ミセス・トロイヤーの料理教室です。日本に有る材料を使ったアメリカン・ホームクッキングです。メインの料理を1品、他にサラダとデザートを1時間位で作り、あとは一緒に頂きます。時々トロイヤー先生も加わり、英語・日本語チャンポンの会話がはずみました。8時頃には全部片付けて帰ります。毎週8—10名位集まっていたでしょうか。トロイヤー家のキッチンに有る機器は、私達にとって当時大変魅力的でした。今でこそ日本の家庭のどこにでも有る品々ですが、やっと1ドアの冷蔵庫が各家庭に普及した頃ですので、米国製の(日本製はまだ無かったのでないでしょうか)フリーザーのついた大型冷蔵庫、オーブン、テーブルについている便利な缶オープナー、電機で動くブレンダー等は珍しいものでした。私が最も気に入った器具はブレンダーで、これを使って素早くマヨネーズやメレンゲを作るのが楽しみでした。しかし、ここはお箸の国、ブレンダー代りに、箸を5~6本一緒にして、一生懸命掻き回す方法をお見せしたこともあります。トロイヤー夫人はこの頃、多少ダイエットを気にかけておられたので、日本の料理素材がヘルシーであることに気付かれ、逆に時々、私達に質問されることもありました。大袈裟にいうと、この料理教室は、キッチンでの異文化交流の場でもあったのです。

何を作っていたか、当時教室に出ていた大竹節さん(退職された職員)の記憶を伺ってみました。スウィート&サワー・ミート・ボール、

ミート・ローフ、ハンバーグ、クリスマスに作った白いパンと黒いパンを重ねたサンドウィッチ、星やツリーを形どり、色とりどりのアイシングで飾ったクッキー等だそうです。私の記憶には、キャセロールの中に、ご飯、マッシュルーム等の野菜を混ぜ入れ、上にホワイト・ソースをかけて、オーブンで焼いたもの、豚肉と生姜、パイナップルを炒めて正油で味付けしたもの(ハラマチ・スペシャル)や胡瓜・人参のピクルス等があります。

この料理教室で使った種本が残っていました。東京ユニオン・チャーチ、婦人会が作った料理の本、「BUY IT'N TRY IT」3版、1963年版(初版は1954)です。外国から日本に來られた婦人達が、日本で手に入る材料で作ったレシピを持ち寄り、編輯された本です。トロイヤー夫人の他に、当時ICUにおられた、ミセス・クラニヤン、ミセス・ショーロックが出されたレシピも有ります。毎日の献立は勿論、子供のおやつ、アイスクリーム、各種サラダ・ドレッシングの作り方等が記載されています。今様のグルメではないけれど、手早く出来る家庭料理の数々です。創作料理が多いので、料理のネーミングに面白いものが有ります。例えば、「百万長者のパイ」・「ポールの好きなクッキー」(トロイヤー夫人)、「我家のお気に入りどんぶり」・「太陽光線のマヨネーズ」(ショーロック夫人)、「ごまキャロット、ごまスピナッチ」(洋風ごまよごし)(クラニヤン夫人)などです。前記の「原町スペシャル」は、当時米軍キャンプの有った原町に住んでいた方からのレシピです。この本は読物としても楽しい料理本です。

後に、この料理教室が出来た経緯を知りました。トロイヤー先生が書かれた三木喜之介氏(旧職員)夫妻への送別の辞の中に有りました。学生や家庭を持った教職員の大多数がキャンパスに住んでいた頃のことです。「.....朝、ICUへ来て4:30に帰って行く、若い女子職員のグループがいます。彼女達は『ICUファミリー』

になる機会がありません。一緒に何かをして下さる方は、いらっしゃらないでしょうか？」と、三木さんが、トロイヤー夫人に相談にみえたそうです。そこで始まったのが、ミセス・トロイヤーの料理教室です。お陰で、私達も、ICUファミリーの一端を味わせて頂いた訳です。この料理教室に前後して、篠遠夫人、原島夫人も料理教室を開いておられたようです。

開学以来、特に学生数の少なかった初期から、私がICUに来た頃までは、ICUファミリーという言葉が頻繁に使われていました。トロイヤー先生宅に、新入生が1度は招待されていたようです。価値観研究室のスタッフ・ミーティングも、しばしば、先生のお宅で行われました。当時のスタッフ、3人の助手とは、大和田康之先生(現Redlands University教授)、藤田恵璽先生(聖心女子大教授)と藤本隆先生(元東大教授)の若き日のことです。ご夫妻の帰国が間近になった頃、スタッフ一同、家族ぐるみで、先生のお宅へ招待されました。それぞれ、若い奥様と、幼いお子さん達を連れて来られました。特に大和田家のチビっ子達が、トロイヤー夫人の膝の上で、グランドマーと言っていたのが記憶に残っています。藤本家のお嬢ちゃん、藤田家のお嬢ちゃんを交えて、ミセス・トロイヤーが、幼い子供達と遊んでいられた光景は、まるで名絵を見る様な思い出です。

編集後記

9月2日(水)、秋の入学式が行われ、20を越える国々から約180名の新入生を迎え入れた。夏の光の中で閑散としていたバカ山のあちこちにも学生たちの姿が戻ってきた。

翌3日(木)は広報課の引っ越し。本部棟正面玄関の階段を上ってすぐの部屋から、今度は2階中央のオープンスペースへの大(?)移動。募金グループ、50周年記念事業室と一緒に、50周年事業本部として、来年創立50周年を迎えるための準備を進めることとなった。次号のGazetteからは新しいコラムを設け、毎号、周年事業の進捗状況についてのご報告をしていきたいと思う。

次回の発行は10月1日(木)となります。記事の掲載を希望される方は9月21日(月)までに書面にて広報課までお持ちください。また電子メールでの記事も受け付けます。

トロイヤー家の大型冷蔵庫に、いつも、アイスクリームや、ケーキに添える特製ソースがあったのも、この様に、いつでも、ICUファミリーを温かく迎える為だったのでしょう。帰米に際し、料理教室のメンバーから、お礼に何か記念になるものを差し上げたいと申し出たところ、夫人は、茶碗蒸しの茶碗と箸置きを希望されました。恐らく、アメリカで、日本から訪ねて来るゲストに、箸を添えて、茶碗蒸しなどを出されていたのではないのでしょうか。或いは、茶碗蒸しメソッドで、カスタードを作られていたのかも知れません。

1997年7月、トロイヤー夫人と篠遠夫人、あの美しかった隣どうしのお二人が、90才台で相次いで昇天されました。又この原稿を書いている時に、藤田恵璽先生の訃報を新聞で知りました。心よりお三人のご冥福をお祈りいたします。同時に、最愛の奥様を亡くされたトロイヤー先生が、どうかお健やかに過ごして下さいよう祈って止みません。

*この原稿は夫人逝去の直後(博士ご存命中)に執筆をお願いしたものです。原文のまま掲載させていただきます